

東シナ海航路

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 英信 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008590

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

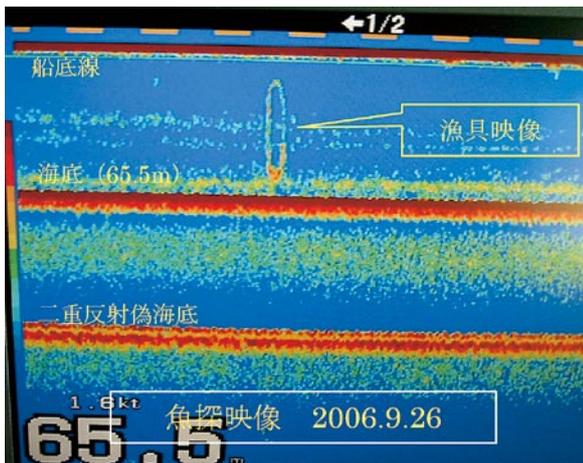


調査航海のエピソード

— 東シナ海航路 —

陽光丸船長 山崎 英信

最近は、陽光丸が東シナ海で調査行動をしていて、日本の漁船を見かけることは少ない。



ほとんどの海域で中国漁船が席卷しておりその数は半端ではない。レーダーでは数百隻の映像を見ることがもしばしば。

そして、陽光丸はついに中国の監視船にも出会うこととなった(写真上)。昨年2月、場所は沖縄と大陸との中間付近。監視船は陽光丸を無線で呼び止め接近、「中国の海域だから立ち去れ!」と言ってきた。この時は漁業に関する行動は日中間で認め合っていることを主張し事なきを得たが、「ここまで来たか」という実感であった。

また、中国漁船群の中での調査は困難を伴う。トラブルを避けるように配慮して行動するが、観測中に向こうから接近してくることもある。その多くは底曳き船であるが、何の漁業かわからないこともある。海面のおびただしい旗竿を避けながら航行していたとき船底に何か当たった。異状はなかったがその時の音響映像(写真下)で、それが海中に設置されたアンコウ網(込瀬網)とわかった。以後、これら船団からは大きく迂回する航路を取っている。

〈コラム〉 アンコウ網とは

底曳網と類似した形状の網を用い、それを曳航するのではなく、潮流によって受動的に魚介類を漁獲する漁法。韓国では鮫鱈網(アンカンマン)、中国では一般に張網とか定置網と呼ばれる。西海ブロックの関係水域では、潮汐の大きい有明海や黄海を中心に発達し、現在は、東シナ海でも広く行われている漁法。網口をいかに拡げるかが課題であり、最初は木材や竹、その後金属のパイプを使用して網口を拡げたが、大型化に伴って重量が過大になること等が問題となった。この問題は、韓国国立水産振興院(現在国立科学院)が、左右にキャンバスのカイトを付けて拡げる方式を開発したため解決し、以後、軽量化、大型化が進んだ。燃油使用量の少ない省エネ漁法であるが、資源管理的には特に幼魚の混獲が問題とされる漁法でもある。(解説:時村東シナ海漁業資源部長)

